

一 六人

或る夕方、まだ外がやう／＼暗くなりかけた時分から、六人の人達は、みんな一とかたまりになつて集まりました。

ポオル叔父さんは大きな本を読んでゐました。叔父さんは、本を読むのは一番ためにもなり、また疲れをやすめるのに、これ程いゝものはないときめてゐますので、働いたあとでやすむ時には、いつも本を読みます。叔父さんの室の、松材でつくつた棚の上には、いろんな種類の本が綺麗に整頓して並べてあります。其の中には大きい本や小さい本や、絵入りのや絵なしのや、ちやんと製本したのや仮綴のまゝのや、また立派な金縁のまでであるといふ風です。叔父さんが其の自分の室に閉ぢ籠ると、大抵の事では其の読書を止めさす事が出来ません。ですから、ポオル叔父さんはどんな話でも知つてゐるとみんなが云つてゐます。叔父さんはたゞ読むばかりではありません。自分で調べて見たり又物事を注意して見たりもするのです。自分の庭を歩く時にも、よく蜜蜂がブン／＼羽の音をさせてとり囲んでゐる巣箱の前や、小さい花が雪のやうに散つて来る接骨木の茂つた下で立ち止まつて見たり、又或る時には、這ひまはる小さな虫や、芽を出したばかりの草の葉をよく見る為めに地面に屈み込んだりしてゐます。一体何を観てゐるのでせう？ 何を調べてゐるのでせう？ それは誰れにも分かりません。しかし叔父さんのさういふ時の顔は、丁度神様の不思議な秘密を見出して、それと面と向き合つたやうに、気高い歓びに輝いて来るとみんなは云つてゐます。私達が本当に感心して聞くあの叔父さんの話は、さういふ時に出来るのです。私達はその話には本当に感心します。そして其の上に、何時かはきつと私達の役に立つ沢山の物事を覚えます。

ポオル叔父さんは勝れて立派な、信心深い人です。そして又『いゝパンのやうに』誰れにでも親切な人です。村では、叔父さんの学問が大変皆んなの助けになるので、ポオル先生と云つて非常に尊敬してゐます。

ポオル叔父さんの百姓仕事を手伝ふのに――私はあなたに、叔父さんは本をよむのと同じやうに、鋤^{すきくわ}をどう握るかと云ふ事もよく知つてゐて、自分の小さな持地を上手に耕やしてゐるのだと云ふ事も話さねばならなかつたのです――ジャツクといふお爺^{じい}さんがゐます。お爺さんは、アムプロアジヌお婆^{としと}あさんの年老つたつれあひです。アムプロアジヌお婆あさんは家の中の事によく気をつけてゐますし、ジャツク爺さんはまた畑や家畜の面倒を見ます。二人とも大変にいゝ召使ひです。そして、ポオル叔父さんにとつてはすっかり信用の出来る、二人の友達でもあるのです。二人はポオル叔父さんが生れた時も知つてゐますし、ずっと長い間此の家にあるのです。まだ小さかつたポオル叔父さんの機嫌が悪い時に、どれ程始終ジャツクは柳の皮で笛をつくつては慰めてやつたか知

れません。そして又アムブロアジヌお婆あさんは、どんなに度々、小さいポオルが泣かずに学校に行く様に勢づける為に生みたての卵をゆではお弁当の籠の中に入れてやつたでせう？ さういふ風に、ポオル叔父さんは、お父さんの召使ひの年老つた二人から大事にされました。叔父さんの家は又此のお爺さんお婆あさんの家でもあるのです。あなたにもジャツクお爺さんとアムブロアジヌお婆あさんがどんなにその御主人を大事にしてゐるか、お分りでせう！ ポオル叔父さんの為なら、二人は四ん這ひにでもなる位なのです。

ポオル叔父さんには、家族がありません。一人ぼつちなのです。が、叔父さんは子供達と一緒にゐる時程楽しい事はないのです。子供達は誰でも話ずきです。又誰でもあれこれというんな事をたづねます。心を引かれる事は何んでも貴い正直さでたづねます。ポオル叔父さんは、自分の兄弟にいろいろ頼んで漸く暫くの間其の子供達を叔父さんの家に暮らさせるようにしました。それは、エミルとジユウルとクレエルと云ふ三人の子供でした。

クレエルは一番年上です。初物のさくらんぼが出る時分には丁度十二になるのです。ほんの少し内気ですが、よく働く、すなほな優しい女の子です。それにちつとも高慢なところなどは持つてゐません。何時でも靴足袋を編んだり、ハンケチの縁をとつたり、学課を勉強したりしてゐて、日曜日に着る着物はどれにしようかといふやうな事は考へません。そして叔父さんやアムブロアジヌお婆あさんに頼まれた事は、直ぐに間違へずにしてしまひます、どんな事でも、自分が役に立つ事を嬉しさうにして手伝ひます。それは、本当にいゝ性質を持つた子です。

ジユウルはクレエルよりは二つ下です。いくらか瘦せてはゐますが、生き／＼した、何でも焼きつくす燃えるやうな性質の男の子です。で、何かに氣を取られると、夜も眠る事が出来ません。何かを知りたいといふ慾のためには決して飽きる事を知りません。そして見るもの聞くものが、ジユウルには知りたくてたまらないものばかりです。藁きれをひつぱつてゆく蟻でも、屋根の上でチウ／＼鳴いてゐる雀でも、ジユウルの注意を引きつけてすつかり夢中にさせてしまふのです。そんな時には、ジユウルは叔父さんにきりのない質問を繰り返します。それは何故ですか？ それはどう云ふんです？と云ふ風に。叔父さんは、ジユウルの此の好奇心を正しく導いて行きさへすれば、きつという結果をあげる事が出来るだらうといふので、大変に信用してゐます。けれども叔父さんは、ジユウルに一つだけ嫌ひなところがあります。正直に云ひますと、ジユウルは一寸した欠点を持つてゐます。それは用心して防がなかつたら、大変な事になるものなのです。ジユウルは癩癩持ちです。若しジユウルに逆ふものがあれば、怒つて、眼をむいたり、泣いたりわめいたり、又自分の帽子を腹立たしさうに放り出したりします。けれども、それは※(「曙のつくり／火」、第3水準1-87-52)立つてゐるミルクスウプのやう

なもので、少しすれば直ぐに静まります。ポオル叔父さんは、ジユウルがいゝ心を持つてゐる事を知つてゐますから、此の悪い癖も軽い小言位で直すことが出来るだらうと思つてゐます。

エミルは三人のうちで一番年下です。そして暴れ坊主です。けれどもそれは年から云へば無理はありません。若し、誰れかの顔にベリイがなすりつけてあるとか、又額にコブが出来たとか、指にとげがさゝつたとかいふ事があれば、それはエミルのせいだと大抵察しがつきます。ジユウルとクレエルが書物をどんなにか喜ぶやうに、エミルは自分のおもちや箱をのぞくのが何よりも楽しみです。エミルは一体どんなおもちやを持つてゐるのでせう？ 其処には、ブン／＼唸る独^{こま}楽や、赤や青の鉛でつくつた兵隊さんや、いろ／＼な動物で一杯になつたノアの箱船や、ラツパー—これはあんまり騒々しい音を出しますから叔父さんから吹くのを禁められてゐます—や、そして此の名高い箱船の中には、エミル一人だけが知つてゐるいろんなものがはいつてゐます。それから忘れないうちに云つておきますが、エミルはもうよく叔父さんにいろ／＼な質問をします。それだけ物事に注意をするやうになつて来たのです。此の世の中では、いゝ独楽より他にもつと面白い事が沢山ある事がわかり出して来たのです。ですから、何時かエミルが、お話を聞くためにおもちや箱の事は忘れてしまつたといふやうな事があつても、誰れも不思議がりはいしないでせう。